

第2回 さまざまな地図と地理的技能

■■ 地図の活用と地域調査編 ■■

地図を使って調べてみよう

監修・講師

田代 博

学習のねらい

自然環境や社会環境に関わる情報を、地域的に整理したものの地理情報という。それを図に表現したものが地図であり現地調査の有力なツールである。代表的なものが地形図である。地図を読むだけでなく、地図に整理して発表できるようにすることも大切である。地域調査は、十分な事前準備を行い現地では観察だけでなく地元の人への聞き取りも行う。

今回のポイント

- 地理情報の地図化
- 地形図の活用
- 身近な地域の調査

■■■ 地理情報の地図化 ■■■

地理情報を空間的に表現した地図は、作成の意図や目的により一般図と主題図に大別できる。気候、土壌、人口分布、貿易など特定のテーマに基づいて重点的に表現したものが主題図である。ふだん見かける観光案内図をはじめ多くの地図は主題図になる。地表の事象を網羅的に表現したものが一般図で、地形図が代表例である。

主題図の多くは統計資料を基に作成される統計地図である。表現のしかたはさまざまある。ドットマップ、図形表現図、流線図、等値線図、階級区分図などである。統計データの値によりベースになる地図自体の大きさを決め、特徴が一目で分かるようにした地図をカルトグラム（変形地図）という。この地図が効果を持つのは、その地域の本来の形、大きさが分かっていることが前提になる。

■■■ 地形図の活用 ■■■

国土地理院が発行する地形図は縮尺により3種類ある。全国を網羅する縮尺が最も大きいのが2万5千分の1地形図で約4,420枚ある。5万分の1地形図や1万分の1地形図（都市部を中心に発行）は現在は更新されていない。20万分の1地勢図は比較的広い範囲を眺めるのに適した地図である。

国土地理院は、同様の内容を地理院地図の名称でインターネット配信している。地形図以外に、空中写真、標高、地形分類、災害情報など多くの情報が掲載されている（スマートフォン

でも閲覧できる)。

新旧の地形図を比較すると地域の変化を具体的に知ることができる。古い地図は今では再現できない過去の様子を示した「タイムマシン」と言うことができる。土地利用別に着色したり、等高線をなぞると、変化が読み取りやすくなる。「今昔マップ on the web」というウェブサイトでは、明治以降の新旧の地形図を切り替えながら、全国の都市部を表示させることができる。

地形図は明治以降、第二次世界大戦終了まで、主に陸軍の組織が作成していたため、軍事施設などは白抜きになったり、あえて実際とは違う表現をしたりすることもあった（「戦時改描」という）。地形図を自由に目、手にすることができるのは「平和の象徴」であるともいえる。

■ ■ ■ 身近な地域の調査 ■ ■ ■

地域調査はまず最初にテーマを設定しよう。自然、産業、生活にかかわる問題などさまざま考えられるが、興味を持ち、切実に感じていることにテーマを絞ることが大切である。著名な観光地でない普通の町にも、個性、特徴、何らかの問題がある。

テーマ、対象地域が決まれば、事前準備（予備調査）を行おう。文献調査が中心になり、図書館や博物館で調べたり自治体の資料を利用する。今は、多くの組織がインターネットで資料を公開しているが、それが全てではないので、必要に応じて実際に訪問して資料を入手しよう。昔の地図は、国土地理院の「地図・空中写真閲覧サービス」というウェブサイトで、種類や入手法などを知ることができる（国土地理院の本院や各地方測量部で実際に閲覧できる）。

現地調査（野外調査）に必要なものは地図、カメラ、方位磁石、フィールドノート（記録用ノート）などである。スマートフォンがあればほとんどのことができ、GNSS（全地球測位システム）機能を利用すれば移動したルートの記録もできる。しかし、広い範囲の確認には紙地図が必要であり、必ず持参しよう。

調査の種類にもよるが、可能な限り現地の人に話を聞こう。貴重な一次資料になる。

まとめは、自分なりのオリジナルな見解が盛り込めるようにし、地図表現にも工夫しよう。